三方良しは住民に喜んでもらうために



が欠かせない

解決すべき課題を見極めること

注者側にとっては1日も早く現のための手段は何かである。発

道路取締役常務執行役員元北海道局長•前西日本高速 奥平 聖氏

現場の課題に対

し、発生者が、 できるかを1日で伝えようとい には「可及的速やかに」という

っかけとなった「ワンデーレス三方良しの公共事業推進のき

根幹はコミュニケーション 局に一気に広まった。特記仕様きっかけに、07年度から各整備 に15件の工事でワンデ 縮に結びつくが、そのためには ンスの試行に踏み切ったことを 海道開発局が2005年度 中で意識を変えて レスポ つ。

ことも大きい の実現のための手段を考える。 ある。それぞれに目標を掲げ、そ する社員に変えることが狙 自由に発言できる場を持った 自ら考えて行動

もそれに合わせて準備できる。 そも期限を切って に落ち着いた。 スタンスを持っていたが、そも そこでい 日で回答する枠組み そうすれば現場 つまでに返答で いるわけでは ことはできない ワンデ できる立場の人に許可を得る必 に伝えることになり、 デーレスポンスを実現するションが整っていなければ

つまりは先輩や上司

特別講演

組みを中心に紹介した。

コミュコニ

ごう課題を抱える中、担い手数の減少、労働者の高齢化な

担

建設投資や建設業の就業者

基 調 講

演

を推進しており、この考え方は (発想・行動・スピー NEXCO西日本ではT さまざまなメン TASは成長のツ レスポンスにも通じ 会社の成長は自分た 運動 確保の重要性を指摘、どの課題を抱える中、

ている環境づくり

四国地方整備局の取り

で頑張る建設業企業に活躍し

企画部長国土交通省四国地方整備局

め、配置予官をするを図るた 若手支がで四国各県で実施する。 業も参入できるよう、「企国の工事の経験が少ない 徳島県の建設企業に所属する と同等に評 事の施工経験につ 評価に県の工事成績を活用 「なでしこパ へとしての経験を監理技術者 徳島河川 者が多い を201 している。 現場代理で、比較 15年度

事現場での環境改善の取り組安全パトロールを実施し、エプ」が女性目線による合同の 女性建設技術者で構成す 「なでしこBC連携グル の女性建設技術者による る

域建設業新未来研究会と共催し、テーマを「10年の軌跡から学び、

三方良しの公共事業推進研究会の「三方良しの公共事業推進カンフ ァレンス」が、2007年5月の初開催から10回の節目を迎えた。6月10 日に高松市のかがわ国際会議場で開かれた第10回カンファレンスは地 たな一歩を踏み出す」に設定。砂子邦弘理事長は「担い手不足など建 設業にとって、将来の課題は山積している。10年の三方良し研究会の

年に向けた三方良し公共事業推進の方向性が提示された。 左から岸良氏、石橋氏、奥平氏、熊谷氏 良裕司様

のカンファレンスで紹介された事例はこれま クセッションは石橋氏、元北海道局長・前西日 コンサルティング日本代表の岸良裕司氏が 「三方良しの公共事業改革」と題した 公共事業推進研究会理事で一二 発表事例には感動がある。 位員の奥平聖氏、 かっこいい産業になろう 働いて良しの流れつくる

きた印象が強かったが、

それが

までは多く

当初は一部の建設会社が取り組んで

組みが各地に出てきた。

。それぞれ、

活動を振り返る中で、新たな一歩を踏み出すきっかけになってほしい」

とあいさつ。来賓として出席した前四国地方整備局長の石橋良啓氏は

「担い手3法の精神も三方良しの公共事業推進の考え方に通じてい

げてほしい」と期待を込めた。会場を埋めた約230人が参加、次の10

での集大成とも言える。

カンファレンスを通し、過去から学び三方良しの活動をさらに広

の公共事業改革が10年の節目を迎えた。

北の大地からスタ

そこが大きく変わった。これまで地域に喜んかかわりたくないという意識を持っていた。

地域活性化の思いを強く

っている。以前の建設業は地域とできる限り

組みを見ると、地域とのかかわりが強くな

でもらえるための仕事をしてこなかった。

にという流れになっている。そこには「すべ例報告を聞くと、最初から喜んでもらうため

果として喜ぶと

ぶという前提があった。しかし事工事が早く終わることで住民も結

レスポンスの目的は工期短

可会を務めた。

北路社長の熊谷一

トークセッション

ョン)に例えれば、

まさに愛

のある建

(アイ・コンストラクシ

物事に取り組む姿勢だ。国交省のi―Conう現場の意識が見える。共通するのは淡々と

中で企業良 わった。そして現場を取り戻し、のために」という思いを軸に、人 う流れを作ってい せるということも住民のためであり、 れが急速に拡大する中で、3次元で現場を見 にあった部分は強かったが、この10年間で三岸良 確かに、儲けたいという気持ちが先 くるような流れになっている。 儲けるためにではなく、 しの領域に入ってくる。 れぞれのやり方で三方良しを実 しの活動は大きく成長している。 まさに担い手確保という課題がある CT(情報通信技術) 行政良し、 かないといけない 後から儲けが付いて といけない。工程を、働いても良しとい 人も会社も変 施工の流

愛ある建設業を目指そう

とうをもらえる。そこに建設業の原点がある 活動を続ければ、住民からたくさ組んでいるからこそ、人も育つ。 そも地域を活性化 はき違えてはいけない を違えてはいけない 攻めている現場だと思う。 は現場の儲けを、 ではなく、成長するための手段である。そも 岸良発表された事例は見方を変えれば、 れば成長はない 建設業も行政も い手確保に欠かせない したいという思いが根底に 育成することは 、材投資への意味を かりと還元する

寿建設社長

会社の品 質目標に 「三方良し を実践」 「元請工事 でODSC (目標すり 合わせ)シ ートを作成

する」を掲 げ、三方良

しの公共事業に取り組んだ。 現 化工事」を「橋を長持ちさせる工事」 ・ 工事手板で分か で

> 報を共有している。 ことし迎える創業50周年の企業理 念として「喜ばせる」を掲げた。 「一番はトンネル技術や土木技術で 喜ばせることだが、付加価値として 『喜ばせる』ことの実践が、三方良

昔から魅せる現場づくりを行い、 喜ばせることを心掛けている。発注 コミュニケーションが良くなり、事 なる好循環が生まれた。

礒部組常務取締役 礒部 英俊氏 工事主任 田中 彰司氏 技術部長 宮内 保人氏

る人が楽しめることが必要であり、

1そう

ごば業界自

体の魅力につながらない



高知県の建設優良工事で9年連続12 件受賞した。「チーム力、コミュニケ ーション、伝え合い(協働)」がその 理由とし「全社員に『私たちのお客さ はんは住民』という考え方が流れている」 住という。

住民に理解を得るため、工事だより を配布すると、完成後に「ありがとう」 と言われ、コミュニケーションを図る ことができた。

台風時に、現場やバックホウが土砂 で埋まった時も、みんなで知恵を絞り、 工期内で完成するよう工程を組み直し 現た。「当初の工期よりも10%の工期短線を達成した」によりません。 縮を達成した」とし、社内のコミュニ ケーションの重要性を説く。発注者と の打ち合わせには3次元を活用、意思 疎通を図ることができた。保ち続ける ぶれない軸は「私たちのお客さんは住 民です」という考え。「信頼は現場か らしか生まれない。現場で生まれた信 頼は、現場でストックされ、その信頼 がわたしたちの『武器』となることを 信じ、仕事を続けていく」と語る。

内山建設土木部次長 金丸 正明氏

宮崎県発 注の治山工 事で、三方 良しに挑戦 した。別工 事の工事用 道路の完成 現が長雨によ

り約3カ月 遅れ、施工 従時期が台風 時期に重なった。「標高950标での 工事で、11月の終盤になると雪が降 るため、それまでに工事を終える必

要があった」と振り返る。 まず、現場従事者に配慮し、満足

度を高めることが、発注者や地域住 民の満足につながると考えた。 光波データで、地山の動態を測定 ・記録し、作業員に異常がないこと

を伝え、安心を与えた。生コン車の **育** を伝え、女心と いここ 往来に耐えられるように、路盤を入 か れ替え、補強し、スムーズな生コン 打設につなげた。BCP(事業継続 計画)の一環では、大雨時の対策と して避難所を設けた。その結果、住 民から感謝の声も寄せられた。

さらに、宮崎県発注の治山工事で 表彰を受けた、「これを機に現場従 事者の満足度を高め、『三方良し』 を推し進めていく」と決意した。

をはっきりさせることが何よりも大事だ。 i-Conもその手段のひとつであり、目的 にれは建設業だけでなく、発注者も同様だ。 新たな確実な

住民からたくさんのありが 。この10年で各地に広がっ 信念を持って取り

さぞ建設業は "かっこい ことは間違いない 住民と向き合う現場ばかりになったら、100年後にはもっともっと増えるだろ

現場の週休2日も実現する。

森崎 英五朗氏

せ

住民や地域貢献を意識、「長寿命 に言い換えるなど、工事看板で分か りやすく説明するようにした。社内 の掲示板「こまめチャンネル」で、 現場での良い取り組みを紹介し、情

しにつながる」と語る。 者や住民を「喜ばせる習慣」は「新 しい三方良し」だ。喜ばせることで、 故も起こりにくくなり、品質も良く

で、小千谷 ちぢみの着 物を着て登 場した新潟 **受** 県土木部道 路建設課の 発 瀬戸民枝課 注長補佐が、

小野組社長

小野 貴文氏

冒頭、ビ

デオレター

県内で三方 者 良しの公共事業が広がっていった経 が緯を説明した。

これを受け、三方良しでの受発注 者の関係を夫婦に例えた。「(新潟で **歩** の)三方良しの公共事業は、たった 4年前に始まった取り組みだ。それ 4年則に始まった取り組のた。 これ までは仮面夫婦で、県と建設企業の 関係は、冷え切った関係だった。い までは夫婦円満で、良い家庭を築い 出ている」

「受発注者が一緒に学ぶことで、 『誰のために、何のために工事をす るのか』ということを共有し、話し 合う場ができた。 地域 しんこう はてくれ、『ありがとう』という言 せらに なぜ良い を葉をいただけた。さらに、なぜ良い 夫婦(受発注者)関係なのか自慢(事 例発表) しようと、三方良しの公共事 業推進研究会新潟支部を設立した」 とし、「受発注者が互いに一歩踏み出 す勇気を持ち、良い公共事業を四国 でも行ってほしい」と締めくくった。

一二三北路 建設土木工事部課長

坂下 淳一氏

ほとんど の企業が敬 遠した札幌 市発注の水 管橋新設の 上部工工事 で、建設Ⅰ CT(情報

を活用した 三方良しの

 \mathbf{C} 公共事業に取り組んだ。悪条件の工 事となり、現場を検証した結果、ベ ント架設とクレーン架設を組み合わ せ、さらに吊りタワーを設置する独 自工法を提案した。安全に工事を進 めるため「ICTを導入することで、 不可視部分を可視化することを検討 した」と振り返る。

3次元ソフト「スケッチアップ」 を活用し、施工方法の検討と安全教 育を行った。3Dメガネを使ったV R (バーチャル・リアリティー) で さらなる現場の可視化を図った。成 果として、全作業環境を現場関係者 が共有し、無駄なく安全に施工する ことができた。さらに、現場が活気 付いたほか、見学会などで一般市民 にも理解が広がった。その結果、同 市の工事評定点で、どの企業も超え ることがなかった89点の壁を越え、 95点を獲得、高く評価された。

建設通信新聞